



TITLE:

松山支部たより

AUTHOR(S):

CITATION:

松山支部たより. 天界 1934, 14(155): 172-172

ISSUE DATE:

1934-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165495>

RIGHT:

バイエルは一星座中光度の順によつて希臘文字アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、……オメガの24を附し、それからは a, b, c, d, ……と名を附することに致しますが、それではまだ充分の数ではありませんので、フラムステッドは一星座中赤經の順に番號を附けましたが、それでも3000餘りしかありません。現今では星の目録の番號によることになつてゐます。

結 語

天文學の効用を述べて結語としませう。天文學は學問の中で最も古いものでありますが、現今のやうに發達したのは分光器の發明後で、これによつて星の性質を知り、望遠鏡によつて肉眼で見えざるものを見、寫眞によつて一層その微光星をも確め得るのであります。

吾々は北極星の位置によつて方角を知り、星の子午線通過によつて精密な時刻を定め得るものであります。夜間飛行や砲兵の夜間射撃にも星が利用せられてゐます。水と天とのみのところを航行する船舶が星に導かれることはいふ迄もありません。

天文は古代は帝王の學として大に重んぜられたものであります。それは星を觀測することによつて、季節を知り、民に播種の時期を誤らしめず。又收穫の適當の時を知らしむることが、帝王として殊に大切なことであります。支那では天壇を設け、帝王はこれに登り、星の運行を見定め、曆を作り、民にその時を知らしめたものであります。

又宇宙の神祕を知り、星の運行の嚴肅なことを見まして、精神修養とすべきものであります。

この機會に閑却されてゐました天文の知識を喚起し、文化人士の天文常識を養はれんことを沖縄諸氏に熱望するものであります。

(昭和8年6月16日午前7時45分臺中丸に於て)

松 山 支 部 た よ り

一月22日午後6時より東亞天文協會松山支部の例會を催しました。參集せるもの矢島、田中、加藤、藤原、森永、脇田、半田、住井、山本、河路、土居の會員と、他に二名で、先づ最初に河路教授が開會の辭、(2)自己紹介、(3)河路教授の日蝕及び月蝕に関する講演をせられ、最後に土居氏撮影の月と金星と土星の掩蔽の寫眞六枚を見せ、次會を二月14日に開催する事と、一月31日に月蝕觀測する事と約束して散會しました。